

『雪ミク』を道内ファンが独り占め



Snow Miku Limited edition DAIHATSU Mira Cocoa

■テキスト=青柳 健司(フォトライター) ■Photo=有岡 志信(SAフォトワークス) ■取材協力=ダイハツ北海道販売 白石店 Tel(011)864-2721

そんなココアが、この度マイナーチェンジ。これまでと大きく異なるのは、15種ものボディーカラーが設定され、それぞれ3種用意されたシートカラーとパネルカラーとの組み合わせは、実に160通りにもおよぶ。これによって、ユーザーの嗜好に対し、より詳細に応えることが可能なクルマとなった。同時に、地域限定車種をラインナップに加えたことでも全国各地で話題となっている。これは、ダイハツが今回のみナーチエンジを視野に女性社員による「コカウプロジェクト」なるチームを発足させ、内外装のデザインや装備品などの検討を担当せらる中で実現したもの。全国11のブロックそれぞれが、内外装に地域の特色を反映させた車種を生み出しており、それらの販売も地域限定で行っていくという。

北海道地区においては、「LOVE LOCAL HOKKAIDO」をテーマに3車種を設定。ムースピングバールをはじめ5種の淡いカラーを揃えた「マカラーン」、ブラムブラウンクリスタルマイカをはじめ3種のブラウン系カ

ダイハツが誇る軽自動車のトップブランドとして、摇るぎないポジションを獲得しているのがミラ。その派生モデルであるイースも、経済性の追求とともに安全装備の充実ぶりが高く評価されており、いわゆる「第3のエコカー」の代名詞的存在ともなっている。2009年に、同じくミラの派生モデルでありながらも、独自のカラーを打ち出して登場した「ココア」は、より女性目線を生かしたクルマ作りでユーザーに好感を持って迎えられており、ミラシリーズの躍進に大きく貢献してきた。

■注目の限定車

プロフィール



「Snow Miku」は、初音ミクの「さっぽろ雪まつり」応援キャラクターのこと。通称「雪ミク」として、広く一般に浸透している。第61回の祭典開催時に、初音ミクが雪像になったことをきっかけに誕生した、分身とも言える存在だ。ダイハツ北海道販売の「ココかわプロジェクト」メンバーは、札幌から世界に発信し続けていたキャラクターのパワーとオリジナリティーを借りつつ、まさしく北海道ならではのココアを実現させた。そういう意味では、スポーツカーとは全く異なる観点ながらも、実に革新的な一台が登場したと言えよう。

「そもそも、初音ミクとは?」——などといった解説は他に譲るとして、「Snow Miku Limited edition」は、白と青を基調とした雪ミクのイメージカラーと、キュートなボディーのココアのコラボレートによる、コアなファンにとっては夢のようなクルマだ。次項でも触れるが、随所に他車種には見られないデザインが施されており、限定車と称するに相応しい仕上がりとなっている。

■燃費も向上

まずは何と言つても、トップを白、ボンネット以下を淡いミストブルーで塗り分けたツートーンカラーが斬新である(ミストブルー部分をラベンダーカラーに変更することも可能)。ドアミラーのフロントサイドとフロントコンビネーションランプの端に雪の結晶がデザインされているあたりは、ファッショナアイテ

ムによる「ハイカラーズ」、そして写真でご覧の「Snow Miku Limited edition」である。

■夢のデザイン

「Snow Miku」は、初音ミクの「さっぽ

ろ雪まつり」応援キャラクターのこと。通称「雪ミク」として、広く一般に浸透している。第61回の祭典開催時に、初音ミクが雪像になったことをきっかけに誕生した、分身とも言える存在だ。ダイハツ北海道販売の「ココかわプロジェクト」メンバーは、札幌から世界に発信し続けていたキャラクターのパワーとオリジナリティーを借りつつ、まさしく北海道ならではのココアを実現させた。そういう意味では、スポーツカーとは全く異なる観点ながらも、実に革新的な一台が登場したと言えよう。

「そもそも、初音ミクとは?」——などといった解説は他に譲るとして、「Snow Miku Limited edition」は、白と青を基調とした雪ミクのイメージカラーと、キュートなボディーのココアのコラボレートによる、コアなファンにとっては夢のようなクルマだ。次項でも触れるが、随所に他車種には見られないデザインが施されており、限定車と称するに相応しい仕上がりとなっている。

手の良いクルマとなつた。

「Snow Miku Limited edition」はそのうちプラスXに相当し(ただし駆動系は4WDのみの設定)、本来であれば無条件にメッキフロントグリルとなるところを、他の北海道限定車同様に敢えてパールホワイトグリルを採用している。その点は、カラーのトータルイメージを重視した「ココかわプロジェクト」メンバーの、こだわりのひとつと言えよ。

パワートレインはミライースと共通で、最大出力52ps / 6800rpm、最大トルクは6.1kgm / 5200rpmを発生するツインカムDVVT 3気筒12バルブエンジンに、自動無段階変速機CVTを採用。いわゆるイーステクノロジーの進化により、JC08モード29.0kmを達成(4WDは26.8km)。現行モデルからさらに、エコ性能のランクアップに成功している。

雪ミクと相通じる部分。ガソリン注入口のカバー、リアエンブレム横には、雪ミクのシルエットがはめ込まれ、ルーフレールには「SNOW MIKU」の文字が。インテリアに目を移すと、ステアリングとシートに白と青の専用カバーが施されており、外観にも室内空間にも、雪ミクとの一体感が表現されている。



主要諸元：(Snow Miku Limited edition)

- 全長×全幅×全高／3395×1475×1560mm
- ホイールベース／2490mm
- トレッド／前：1300mm 後：1265mm
- 車両重量／870kg
- 最小回転半径／4.5m
- エンジン／658cc 水冷直列3気筒12バルブ
- 最高出力／52ps/6800rpm
- 最大トルク／6.1kgm/5200rpm
- JC08モード燃費／26.8km/ℓ
- ミッション／自動無段階変速
- ブレーキ／前：ディスク 後：リーディング・トレーディング
- タイヤサイズ／155/65R14
- 駆動方式／フルタイム4WD
- 乗車定員／4名
- 車両本体価格(札幌地区)／1,700,000円



雪ミク©CFM

ディーラーメッセージ

ダイハツ北海道販売 白石店
カーライフアドバイザー

内山 英恵さん

マイナーチェンジによって、以前にも増して静粛性が高くなつたことを実感していただけだと思います。とにかくカラーリングが豊富なので、ライフスタイルや好みにあわせてじっくり検討することができます。

その楽しさを、ぜひ味わっていただきたいですね。「Snow Miku Limited edition」独自のボディーカラーはもちろんですが、オリジナルのシートカバーとステアリングカバーの愛らしさにも、ご注目ください。



踏み込むと、クルマは実に小気味よく発進した。安定走行に入つてからまず実感するのは、静粛性の確実な向上ぶりである。シティユースにおいては、アスファルトの継ぎ目やマンホールなどの微細な変化も、取り立てて走行音が気になるというようなことがなく、このボディーサイズにしては及第点以上のレベルに達している。また、サスペンションも非常に素直な反応を示し、細かなアップダウンをしっかりと吸収してくれているのが印象に残つた。急加速を試みると、非力さゆえに3千回転から4千回転の領域でエンジンの唸りが車内に満ちてしまふが、控えめのアクセルワークに徹する限りでは何も問題はない。さすがに、レスポンスやパワーといふ点では、上位車種と比すると向上的余地を感じるところだが、むしろ「これくらいがちょうど良い」と感じるユーザー層も多いに違いない。

一方、取り回しは軽自動車ならではのスマートさで、視界の広さも手伝つて、ラッシュ時や道幅の狭い市街地で四苦八苦するような場面は皆無に等しく、快適な街乗りを実現している。あわせながらも、ステアリングのタッチがソフト過

（？）が期待される。

それにしても、今回のコラボカーを通じて、世界的に注目を浴びている「初音ミク」の人気の凄まじさにあらためて驚き、同時に我々道民としては、何だかとても誇らしい。

8月26日に都内で行われた新型ミラココア記者発表の席で、地域限定「コアの試みが紹介され、同時に北海道では「初音ミク」との「ラボバージョン」が登場することが発表された。その後から、ネット上にトピックが駆け巡ったと聞く。やがて、ダイハツ北海道販売各店で、日本全国各地から問い合わせの電話が鳴り響くことになる。そのほとんどが、「北海道以外での販売は予定していないのか」といった内容らしい。もともとが、地域限定販売であるため、アフターフォロー体制の整備などの関係から、現段階で我々道民以外のユーザーガ入手できる道は開かれていらない。しかし、今や世界的な広がりを見せる「初音ミク」ファンや「ダイハツ」ファンのためにも、「雪ミク」仕様のミラココアの全国発売を検討してみては如何だろう。シリーズ化しても面白いのではないだろうか。今後、メーカーの英断

試乗車は、「Snow Miku Limited edition」プラスXスマートセレクションSN。車両本体価格は170万円と、このジャンルにおいてはかなり思い切った価格だ。にもかかわらず、9月5日の販売開始から問い合わせが殺到しているらしく、言うまでもなく雪ミク効果は絶大ということであろう。

オヤジドライバー世代の筆者としては、キュートなカラーと内装にいさか照れくさを禁じ得ず、いつもとはひと味違う緊張感の中、右足をアクセルペダルにセット。そのまま軽く踏み込むと、クルマは実に小気味よく発進した。

安定走行に入つてからまず実感するのは、静粛性の確実な向上ぶりである。シティユースにおいては、アスファルトの継ぎ目やマンホールなどの微細な変化も、取り立てて走行音が気になるというようなことがなく、このボディーサイズにしては及第点以上のレベルに達している。また、サスペンションも非常に素直な反応を示し、細かなアップダウンをしっかりと吸収してくれるのが印象に残つた。急加速を試みると、非力さゆえに3千回転から4千回転の領域でエンジンの唸りが車内に満ちてしまふが、控えめのアクセルワークに徹する限りでは何も問題はない。さすがに、レスポンスやパワーといふ点では、上位車種と比すると向上的余地を感じるところだが、むしろ「これくらいがちょうど良い」と感じるユーザー層も多いに違いない。

それが、何だかとても誇らしい。

それでも、今回コラボカーを通じて、世界的に注目を浴びている「初音ミク」の人気の凄まじさにあらためて驚き、同時に我々道民としては、何だかとても誇らしい。

インプレッション

ちょうど良い乗り心地

ぎることはなく、程よい手応えを保ちながらもなおかつ切り返しが楽なのである。ステアリンググカバーのセンターには青地で「SNOW M-I-KU」の刺繍があしらわれており、当然ながらデザイン性を高めるものであるが、実はそのおかげで切り角を認識しやすくなっている。

元来、シンプルなデザインを信条とし、過度に人目を引かないクルマであることがココアの立ち位置である。ゆえに、「Snow Miku Limited edition」も、道行く人が思わず目を奪われるような「ゴージャスさ」を追求していないことは明らかだ。知る人ぞ知る独特の存在感は、見て乗つて実感できるオーナーの特権と言えそうだ。

北海道から全国へ？